



同志社大学文学研究科心理学専攻
文部科学省大学院教育改革支援プログラム

オープンフィールド教育 ニュースレター

GOOD PRACTICE

2008年12月発行

研究センター連携型オープンフィールド教育

「研究センター連携型オープンフィールド教育プログラム」は、本学に設置した「こころの生涯発達研究センター」および「感情・ストレス・健康研究センター」と大学院教育の有機的連携を強化する教育プログラムです。大学院学生に、研究センターで研究に参加させ、多様なインターンシップを経験させることで、学際的かつ国際的な共同プロジェクト研究を可能とし、その結果、大学院で学んだ知識を社会ニーズに応じて活用する能力、研究プロジェクトを企画・実現する能力等を養成する事を目的としています。



同志社行動医学シンポジウム を開催



員)が務めました。大学院生にとって、健康心理学、行動医学、心身医学の第一線で国際的に活躍する研究者の研究発表に触れ、それらの研究者と交流する機会となりました。

本学術集会では、米国心身医学会会長のウィリアム・ロバック教授(オクラホマ大学)、2008年度国際行動医学会プログラム副委員長のリンダ・キャメロン教授(オークランド大学)、2009年度国際感情学会大会委員長のバーチャ・メスキータ教授(ルーバン大学)をはじめ、米国、ニュージーランド、中国、日本の研究者16人が最新の研究成果を発表。発表内容は、情動反応の文化心理学、情動反応の脳内機序と内臓反応、ストレス・情動制御の心理社会的過程、高齢者QOL、死産に起因する外傷性ストレス反応、ストレス関連障害への心理行動学的介入法など多岐にわたりました。

心理学専攻の大学院生約30人は各発表に熱心に聴き入り、集会終了後の懇親会の場も含め、各研究者とのコミュニケーションを図りました。

8月25日、同志社大学寒梅館会議室において、文学研究科心理学専攻の主催により、「研究センター連携型オープンフィールド教育」の事業として、国際学術集会「The Doshisha Symposium of Behavioral Medicine(同志社行動医学シンポジウム)」を企画開催しました。

大会委員長は余語真夫文学部心理学科教授が務め、司会はジョシュア・M・スマイス教授(シラキュース大学)と及川昌典氏(日本学術振興会特別研究



創刊記念 対談

オープンフィールド教育 プログラムの現状と課題

外への意識を高めた 大学院生たち

鈴木 このプログラムがスタートして、約1年が経ちました。今年に入ってから組織的なことを始めました。例えば修士の1年生に関しては、「心理学体系論」の授業でいろんなところへ見学に行っていますね。

佐藤 大学院生たちにとって、良い刺激になっていると思います。教育プログラムが体系論の中に組み込まれたことによって、修士の1年生には、自分を売り込んでいって研究するという勢いが出てきた。産官学連携と言いますが、例えば企業努力を目の当たりにした時、自分たちの学問がそこでどう生かされるのかを随分考えるようになった。実際に役に立つ研究とは何か、また、連携先の企業に対していかに自分たちをアピールして、純粋な学問としての研究を発展させるかなど、視点が広がっています。意識が「外と組んで研究をするんだ」というものに向かっている。彼らがドクター（後期課程）に上がってくれば、もっとシステムティックなものになるのではないのでしょうか。去年はドクターの院生もいろんなところへ研修に行ったので、案外ドクターの院生にも波及していると思います。

内山 もともとこのプログラムは、マスター（前期課程）からドクターにかけてそれぞれの学年で果たす役割が違って、1年生から5年間経ったところできれいな形になるものです。まだ始めて1年目なので一つの完全な形として成果は出ていませんが、それぞれの学年でいい形で成果が出ているのではないのでしょうか。例えば、1年生が子どもや障がい者の施設へ行って勉強して啓蒙を受けている、ドクターの学生は海外の研究者からアドバイスをもらって一緒に国際学会で発表する機会を得るなどしている。そして、それを見ている下の学年の人たちには、そういう場に入っていきたいという気持ちを起こさせています。

佐藤 私は前から関西医科大学と共同研究をしています。その中で、向こうの大学できちっと研究する、博士論文に成果を入れるということをプログラムで謳っていますから、学生の間にもそういう意識がはっきり出てきました。臨床心理学的な、ある種曖昧なもの、なかなか形にならないものを何とか形にして博士論文に取り入れる努力をしないとイケないということで、研究するという姿勢が、より

明確になってきたと思います。

鈴木 私のところでは今年、本プログラムに該当する学生がいなかったけれど、外部との共同研究が縁で、企業の研究センターに学生が就職したり、現在コクヨと行っている研究もどんどん進行中です。NPO法人や本学の研究センターに関係している方たちと行っている校庭の芝生化の研究についても、今いろんなところで講演を依頼されてお話しするような状況です。

内山 今まで共同研究というのは「先生がしているもの」という見方がありましたが、大学院生たちが関心を持ち、自分ならこんなふうに関わりたいという気持ちを持つようになりました。

佐藤 ある研究所に学生を連れていった時、そのスタッフが一人ひとり、僕たちに挨拶してくれるんですね。大学では「自分たちは研究していればいいんだ」という雰囲気があるけれど、民間の研究所では、もちろん研究はするけれども、人間関係も大切なんだということを学生たちは感じたようです。

大学院教育を組み込んだ ユニークな研究センター

鈴木 我々は、心理学科の中に2つの研究センターをつくり、そのセンターの中に、大学院生だけではなく卒業生も、あるいは同志社大学とは縁のなかった企業の研究者の方にも参加していただいている。心理学を縦糸と横糸に考えて、縦糸はこころの生涯発達研究センター、横糸が感情・ストレス・健康研究センター。研究センターを網の目のように編んで、そこに大学院教育を入れたという点が、このプログラムの特徴的な点だと思います。

内山 最初から大学院教育を組み込んだ研究センターなんですよ。

鈴木 そういうものは今までどこにもなかった。だからこそGPに採択された。同志社大学でも、研究センターが大学院の授業を担当することはあっても、一緒にやろうという発想はなかったと思うんです。そこが新しいところですね。うちのリベラル・アーツの伝統かもしれない。学生を大切に、責任を持たせ、学生と一緒にやっという気風がある。

内山 研究センターというと、チーフがいて、その下で大学院生が手伝うという構図ですが、ここでは大学院生にもプロジェクトを持たせます。教育的背景をもって、学生をバックアップするから、大学院生

プログラム代表者

鈴木直人【すずき・なおと】

同志社大学文学部心理学科教授。医学博士、文学修士。専門分野は感情心理学。現在の研究課題は「ポジティブ感情とその機能」「感情表出と生理反応」「空間的枠組みが直立姿勢に及ぼす影響」など。



新時代の大学院教育を目指し、大学院の枠を越えて大学院生が学ぶシステムをカリキュラム化したのが「研究センター連携型オープンフィールド教育プログラム」です。2007年度に採択されて以来、試行錯誤の中でさまざまな取り組みが行われています。その中で、大学院生や教員の意識にはどのような変化が表れてきたのか、新たに見えてきた課題とは何なのかを、本プログラムをリードする3名の教員が語り合いました。



中心の研究をそこでしてもらいたいと考えています。最初から学生に責任を持たせるんです。それがうまく機能すれば、もっと研究視野が広がると思います。

企業との連携について 心理学は何ができるのか

鈴木 企業や地域との連携窓口である本学のリエゾンオフィスに、新しく文系の担当者が来た。その方に我々も心理学に関するいろんな情報を与えないといけなと思いますね。こちらにはいろんな分野にいろんな才能を持った教員がいるんだから。そこから学生との関係もできれば、面白いことができると思う。研究センターだけではなく、リエゾンオフィスも巻き込んでやっていく必要があるんだろうね。

佐藤 今まで「産」が「学」に興味を持つのは、何か新しい製品を開発しようとか、そういうものでした。その点、心理学は実態がよく見えないということもあったと思います。でも同志社大学ではずっと実証的に心理学をやろうとしてきたから、みんなに分かりやすい成果を出そうとして取り組んでいる。そういうところで協力し合い、こちらが心理学的なファクターを明確にしていく努力を続ければ、いろんな企業ともつながっていくのでは。オープンフィールド教育として、ますますアクティブになっていくと思います。

内山 うちでは、たまたま講演会を聴きにきた方との連携ができるというケースが多いです。産業界とアカデミックな学会の両方を知っている人がいれば、両方を上手につなげていけます。

鈴木 文系で産官学のリエゾンをするのは、なかなか難しい。社会のニーズに合やすのは特にね。それに我々が関わる以上は科学的なことをやりたいというのがありますよね。文系は虚学志向だけど、心理学はそうじゃない面もある。そこで何ができるのかという情報発信を、我々はもつとする必要がある。現状では外に対して、特に企業に対してはそれほど発信していないんですよ。

内山 お互いが気付いていないけれど、議論すれば新しくできることもある。佐藤先生が研究しておられるように、病院などですと、こちらのできるものが自然に湧いてくるんでしょうけれど。

佐藤 いま我々の大学院生がやっている生活習慣病のコントロールなどですと、うまくいくのでしょうか、もともと心理学というと精神科のテストをするところだったりしたわけですね。でもやはり、もっと内科的な領域も大切であって、そこへ我々は入り込んでいると思います。医者が「たばこをやめなさい」と言っても、患者はなかなかやめないということは、だんだん分かってきている。そこには何か別の技法がなければだめなんだと。そういうことが分かってきた段階だと思います。そこで臨床心理学も、今までの無意識とか何とか言っていた世界から、実証できる世界へ入っていきこうとなってきた。先日も生活習

プログラムサブリーダー

佐藤 豪【さとう・すけのぶ】

同志社大学文学部心理学科教授、感情・ストレス・健康研究センター長。医学博士、文学修士。専門分野は臨床心理学、健康心理学。現在の研究課題は「タイプA行動パターンと心臓血管系反応の関連についての研究」「心身症の心理行動特徴の研究」「肥満、糖尿病、喫煙に関連する心理的要因の検討」など。



プログラムサブリーダー

内山伊知郎【うちやま・いちろう】

同志社大学文学部心理学科教授、こころの生涯発達研究センター長。教育学修士。専門分野は発達心理学。現在の研究課題は「自己空間移動が乳児の発達に及ぼす影響」「感情の発達心理学的研究」「交通安全行動に関する心理学的研究」など。





慣病認知行動療法研究会があったんですが、東京から循環器系の医者が随分来ました。医者もそういう方面に興味湧いてきたんですね。心理学が入っていける分野はたくさんあると思います。

鈴木 それから、企業などと組んでプロジェクトを立てると、今度は外国と組むのが難しくなってくるという問題がありますね。企業の求めているものは、学問的ではないところが多分にある。一方、我々が外国人と交流するのは学問上のことが多い。一つのことでも方向が違くと、企業での話を外国へ持っていくのはちょっと難しい。企業秘密の問題もあります。このデータは発表してもいいとか、いけないとか、契約が必要となってくる。痛しかゆしの面があります。

内山 企業とのタイアップ、国際的なタイアップ。いろんな形があつていいと思います。

鈴木 企業の方は、やはり合目的な面が強いです。また、さまざまな研究所では、その年のうちに業績を出して発表する義務のあるところも多い。ある意味、大学にはそれがないわけだから、歩調を合わせにくい場合がありますね。しかしこのプログラム自体が、成果を出して社会に知らせるというものだから、そこは実学の世界と虚学の世界とのすり合わせをしないといけない。実学と虚学との間を狙っているところがあります。

内山 これは企業に頼まれる研究ではなくて、学生が主体的に行う研究を、企業でも興味を持ってもらえる形にするものなんですよ。

研究センターを さらに活用して プロデュース能力を持った 大学院生を育てる

鈴木 そう、そこにこのプログラムの意図がある。企業が「それは面白そうだ、一緒にやりましょう」と言うような研究をね。あとは、大学院生がそのような経験をいかに自分の研究に取り入れて、博士論文まで持っていくか。自分でプロジェクトをつくれるようにならないといけない。これがこのプログラムで一番意義のあることだし、面白いところ。かなり高邁な理念はあるんですけど、だからこそ難しい。

我々もいかに指導していくかが課題ですね。教育プログラムのフェイズ1は、非常にうまく行っていると思います。これから始めるフェイズ2が、今後の一番の課題でしょう。研究センターや企業の人たちにもっと参加してもらう形に持っていけると、もっと話はふくらんでくるんじゃないかな。

佐藤 そういう意味では、研究センターが中心となり、外側の世界とつながるゲートになっている。

鈴木 そこが面白いところだね。フェイズ2に、そういう人たちがうまく入ってきてくれると、フェイズ3まで当然到達できるようになってくる。

内山 フェイズ1では研修先は我々をゲストとして迎えてくれますが、フェイズ2ではその中で学生が主体性を持って研究しないといけない。先方の需要にも合わないといけない点が難しい。

鈴木 かつ、それが学生自身の研究に合わないといけない。

内山 自分がしてきた基礎研究と社会のニーズとがちょうど合ったところの真ん中に、フェイズ2を置く。教員も社会のニーズに目を向けないといけないから、啓蒙されるところがありますし、大学院生は社会人としての意識、自覚を持つことによって成長につながるというですね。

鈴木 大学院生は1、2年で企業などの研究所へ見学にいきますね。これが3年、4年生になった時にどんなところへ連れていくのかというのも、今後の問題ですね。

内山 我々が社会において、どういうフィールドを指向しているかということですね。我々が広がらないといけないのですが、この1、2年、広がりが出ているのではないかと思います。我々もそういう目で社会と接していますから。

鈴木 だからこそ研究センターの人たちが、このプログラムにもっと積極的に参加してほしい。こちらから出て行って見学させてもらうばかりというのは、安易だと思うんです。

佐藤 研究センターには人的資源として、本当にいろんな方たちが入ってくれています。例えば体系論の授業でも、今度は嘱託研究員の人たちなどに話をしてもらう、あるいは研究のアピールをもらう、うちの大学院生をスカウトして一緒に研究するぐらいのものになってくれると、お互い世界がもっと広がる気がします。

鈴木 来年は、自分で研究プロジェクトをつくれる大学院生を一人でも二人でも育てたい。そういう学生が社会へ出ていけば、真にプロデュース能力のある人材となる。既に外との関わりを持って巣立ち、役に立つ研究者となり、企業にとっても優秀な社会人となっていくと思います。そこが今までの卒業生とは大きく違う、期待できる点です。

内山 課題と期待ですね。

鈴木 そういう学生を育てるべく、我々も努力しているし、今後も努力を続けたいと思っています。

(2008年11月20日・同志社大学にて)

*本教育プログラムの3つのフェイズ

■フェイズ1…前期課程

学生を研究インターンシップとして実践的に参加させます。「心理学体系論」の授業を通じて基礎知識の伝授、事後指導などを行い、専門科目においても先端的かつ高度な専門知識を蓄積させます。

■フェイズ2…後期課程1、2年次

学生を共同研究プロジェクト研究員として国際共同研究に参加させ、社会ニーズを視野に入れた学際的研究を自らプロデュースする能力を養わせます。

■フェイズ3…後期課程3年次

学生に5年間の成果を博士論文としてまとめさせます。博士論文には、学生の個人研究だけでなく、自らがプロデュースした共同研究プロジェクトの成果を盛り込むことを義務づけています。

研修報告

より豊かな食生活を提案するために。

山崎真理子

文学研究科心理学専攻
博士課程〔後期〕2年



私は食のメカニズムを探ることにより何らかの新しい知見を得て、自分たちの食生活に目を向け直し、社会に対して、より健康的で豊かな食生活のための情報を提供できればという思いで研究をしています。

具体的な研究テーマは、女性の「食べる」という行動です。特に社会的側面に焦点を当て、一人で食べる時と他の人と一緒に食べる時とでは、食べ方や味覚評定に違いがあるのではないかとこのことを調べています。一般に、他の人と食べるとおいしい、楽しいと言われますね。個食の時代とも言われる現代で、これは家族の団らんにも関係のある問題だと思っています。

この教育プログラムでは、ハウス食品の研究所を見学したり、お茶の水女子大学で研究施設の見学や研究発表を行ったりしました。研究面の細部や研究スタイルの違いを目の当たりにすることは良い経験でしたし、栄養学や医学に近い学部、分野の方のご意見が伺えたことも大変勉強になりました。

2008年3月からはハウス食品との共同研究を始めています。テーマは「食と満足感」。現在は、大学で進めている私の研究計画にご意見をいただいたり、研究手法を教えていただいたりしています。来年からは企業ニーズを取り入れて、本格的な共同研究を行う予定です。今までは大学という限定された枠組みの中でしかできなかった実験や研究が、食の専門家のお話を伺いながら企業との共同研究を行うことで、より大きな枠組みの中で可能になりました。研究に対するアプローチにも違いを感じます。大学では先行研究の論文を読んで仮説を立て、詳細に検討していくという緻密な作業が中心ですが、企業の方は経験則からアイデアを出してこられることもある。そこに創造力が加わることは、大きな刺激になっています。

文学研究科心理学専攻
博士課程〔前期〕2年

山口大輔

最先端の研究に触れて力を与えられました。



現在、私は「競争」に関する研究をしています。例えば得点競技において、勝っている人が追い込まれたり、負けている人が得点を重ねて追い込んだりする状況で、追い込まれる人と追い込む人に心理的、あるいは生理的にどのよ

うな変化が起こるのか。具体的には、被験者にゲームのような課題を与え、心理的な動きや、血圧、心拍、血行の変化などの生理反応を調べています。感情の変化がスポーツに影響を与えることを検証し、それを制御してパフォーマンスの向上につなげる方法が分かれば、おのずと介入の方法が見えてきて、メンタルトレーニングの発展に寄与できるものと期待しています。

オープンフィールド教育プログラムでは、日本の脳科学の最先端に行く理化学研究所の脳科学総合研究センターへ研修に伺いました。一定の脳部位の血流を調べて脳活動を記録するfMRI(ファンクショナル・エムアールアイ)という最新の実験機器や最先端の研究手法を見学できたことは、大きな収穫でした。2008年8月に同志社大学で行われた行動医学シンポジウムでは海外の先生方と親しく交流させていただき、生理学関係の研究に強い印象を受けました。

2007年度

日 時	10月13日・15日
場 所	プログラム説明会 [同志社大学徳照館1F会議室]
内 容	大学院文学研究科心理学専攻の「研究センター連携型オープンフィールド教育」プログラムが、文部科学省「大学院教育改革支援プログラム」に採択されました。秋学期から本専攻の大学院教育の改革の取り組みが始まり、その説明会を開催しました。

日 時	10月19日～11月1日
場 所	ティルブルグ大学 (オランダ)、 ルーヴァン大学 (ベルギー)
研 修 内 容	感情処理・制御の心理学共同研究についての海外研修。ティルブルグ大学で開催される The 4th conference of the (non) expression of emotions in health and disease に参加し研修を受けた後、ルーヴァン大学で研修を受けました。

日 時	11月12日
場 所	学習心理学特講特別授業 [同志社大学明徳館302号教室]
講 師 ・ 演 題	木村英一郎氏：(味の素(株)ライフサイエンス研究所 生理機能研究グループ主任研究員) 「ライフサイエンス分野の産学連携 と先端融合領域としての心理学」 今田 敏文氏：(味の素(株)ライフサイエンス研究所 生理機能研究グループ研究員) 「企業における研究開発の実際」

日 時	11月17日
場 所	びわこ学園 (滋賀県草津市)
研 修 内 容	重症心身障害児施設のびわこ学園を見学し、研究領域の活動を直に体験し、お話をいただきました。

日 時	11月29日
場 所	理化学研究所 脳科学総合研究センター (埼玉県和光市)
研 修 内 容	脳科学総合研究センター見学 ①fMRI測定支援センターの見学 ②生物言語研究チームの実験室見学 ③参加院生が各自の研究内容を説明し、上記研究チームの研究員8名と討議し、コメントをいただきました。

日 時	1月19日～21日
招 聘 研 究 者	J. J. Campos氏 (アメリカ合衆国のカリフォルニア大学バークレー校)
招 聘 内 容	インターンシップ研究指導

日 時	2月22日
場 所	特別授業 [同志社大学徳照館共同研究室]
講 師 ・ 演 題	高垣敦郎氏：(ハウス食品(株)マーケティング本部 調査室長) 「食品業界における最近の消費者動向」 石田哲治氏：(ハウス食品(株)マーケティング本部 レトルト・低温食品部) 「食品開発の実際」

日 時	2月29日・30日
場 所	広島国際大学
研 修 内 容	心理臨床センター見学および業務研修

日 時	3月4日～13日
招 聘 研 究 者	Leonard E. Jarrard氏 (アメリカ合衆国のワシントン&リー大学)
招 聘 内 容	講演1: Brain and memory 講演2: Hippocampus, eating, and obesity 実習1: イボテン酸によるラットの海馬損傷の実演 <その1> 実習2: イボテン酸によるラットの海馬損傷の実習 <その2>

日 時	3月6日・7日
場 所	北星学園大学
研 修 内 容	実験室の見学、共同研究打ち合わせ等

日 時	3月7日・8日
場 所	東京女子医科大学
研 修 内 容	小児科学研修 (音楽療法実験見学、光トポグラフ実習等)

日 時	3月7日～13日
場 所	ニュージーランドのオークランド大学
研 修 内 容	医学健康科学部見学、講演会、研究発表等

日 時	3月10日・11日
場 所	ハウス食品、お茶の水女子大学
研 修 内 容	食と健康の心理学に関する研修

日 時	3月14日・15日
場 所	東北大学
研 修 内 容	自己発達研究研修 (鏡映像提示装置実習等)

日 時	3月14日～17日
場 所	琉球大学
研 修 内 容	犯罪被害者遺族の心理、認知行動療法及び沖縄特有の心理、沖縄ユタ文化)

日 時	3月23日～31日
場 所	アメリカ合衆国のカリフォルニア大学バークレー校、 カナダのバンクーバー
研 修 内 容	乳児発達研究研修およびカナダ・バンクーバーで 開催されたThe 16th Biennial International Conference on Infant Studiesに参加し、研修を受けました。

活動報告

日	時	3月26日・27日
場	所	北海道医療大学
研 修 内 容		学習心理学と食行動の関係に関する研修

日	時	3月28日～30日
場	所	福岡
研 修 内 容		共同研究打ち合わせ

2008年度

日	時	4月6日～13日
招 聘 研 究 者		Kathleen D. Holt氏 (アメリカ合衆国のロチェスター大学)
招 聘 内 容		[講演] Mammography Self-Report and Mammography Claims: Racial, Ethnic, and Socioeconomic Discrepancies Among Elderly Women.

日	時	4月6日～13日
招 聘 研 究 者		Stephen J. Lurie氏 (アメリカ合衆国のロチェスター大学)
招 聘 内 容		[講演] Introduction to Generalizability Theory.

日	時	4月14日
場	所	愛知県豊山町保健センター
研 修 内 容		乳児健診スクリーニング共同研究実施に関するアンケート作成打ち合わせ

日	時	5月31日
場	所	びわこ学園(滋賀県草津市)
研 修 内 容		重症心身障害児施設であるびわこ学園の施設および共同研究で開発した機をの見学し、お話をいただきました。

日	時	6月1日～8日
招 聘 研 究 者		A. P. Buunk氏(オランダのグローニンゲン大学)
招 聘 内 容		[講演] Parental Influence on Mate Choice is Associated with Mate Guarding 研究指導

日	時	6月3日～8日
招 聘 研 究 者		Yvonne A. B. Buunk-Werkhoven氏 (オランダのグローニンゲン大学)
招 聘 内 容		[講演] Determinants of Oral Health Behavior in Different Cultures

日	時	6月13日
場	所	福岡大学病院
研 修 内 容		臨床業務に関する講義の受講、病棟見学ならびに集団精神療法・アフターミーティングへの参加、デイケア(SST)見学等

日	時	6月13日
場	所	ハウス食品研修
研 修 内 容		新製品開発のテストの見学および共同研究の打ち合わせ 現在共同研究を行なっているハウス食品(株)の新製品開発のための味覚調査の現場を見学し、また実際に体験しました。

日	時	7月15日～17日
場	所	花王(株)東京研究所、科学警察研究所、コクヨ霞ヶ関ライブオフィス、松下電工汐留オフィス
研 修 内 容		企業が持っている研究所および最新のオフィス環境の見学と、各企業の担当者と研究内容に関する自由討議を行いました。

日	時	8月25日
場	所	同志社行動医学シンポジウム [同志社大学寒梅館]
研 修 内 容		シンポジウムには、日本国内はもとより海外4か国からの研究者が集まり、研究成果を発表しました。

日	時	9月12日
場	所	ハウス食品(株)との共同研究打ち合わせ

日	時	9月13日～15日
場	所	中国蘇州市蘇州大学教育学部
研 修 内 容		道徳性発達に関するメカニズムを探り、日本と中国の中学生を比較調査するための研修を行いました。

STAFF

プログラム代表者
鈴木直人
 同志社大学文学部教授
 研究テーマ 「感情と環境の実験心理学」

プログラムサブリーダー
佐藤豪
 同志社大学文学部教授
 (感情・ストレス・健康研究センター長)
 研究テーマ 心身症を中心とする臨床心理学的研究

プログラムサブリーダー
内山伊知郎
 同志社大学文学部教授
 (こころの生涯発達研究センター長)
 研究テーマ 向社会性の生涯発達の研究

プログラムマネージャー
青山謙二郎
 同志社大学文学部教授
 研究テーマ 学習および動機づけ行動の研究

岡市廣成
 同志社大学文学部教授(2008年3月退職)
 研究テーマ 神経系の機能に関する実験心理学的研究

杉若弘子
 同志社大学文学部教授
 研究テーマ パーソナリティとセルフコントロールの関係

余語真夫
 同志社大学文学部教授
 研究テーマ ストレス経験と感情の社会心理学的研究

荒木紀幸[兼任]
 神戸親和女子大学教授
 研究テーマ 学校における道徳教育の研究

ACCESS & CONTACT



今出川校地へのアクセス	京橋	京阪本線 特急45分	出町柳	徒歩15分
大阪・神戸	梅田	阪急京都線 特急40分	国際会館行き	徒歩15分
京都から	大阪	JR東海道線 新快速28分	地下鉄6分	
奈良から	奈良	近鉄急行 45分		
名古屋から	名古屋	新幹線 のぞみ30分		
関西国際空港	関西国際空港	JR はるか73分	国際会館行き	徒歩すぐ
全国から	大阪(伊丹)空港	空港バス 55分	地下鉄9分	

 **同志社大学**



[問い合わせ先]

文部科学省大学院教育改革支援プログラム
 研究センター連携型オープンフィールド教育
 [文学研究科心理学専攻]

〒602-8580

京都市上京区今出川通烏丸東入玄武町601

TEL.075-251-4416

Email:ji-bun15@mail.doshisha.ac.jp

<http://doshisha.freemind.co.jp/index.php>